



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

幼子イエスが最初に見たのはマリアとヨセフ

主の降誕おめでとうございます。誕生の喜びはどんな人、どんな時代、どんな状況でも喜ばしいものですが、イエス・キリストの誕生はすべてに勝る喜びです。この夜半のミサでは、誕生の瞬間、幼子イエスが目にしたものを想像しながら喜びを分かち合うことにしましょう。

イエス・キリストが誕生した時、最初に出会った人々は誰だったのでしょうか。まだはっきり見えていない中で、ぼんやりとその目に映ったのは、当然の答えなのですが、マリアとヨセフでした。この基本的な出来事から出発したいと思います。

イエス・キリストが最初に出会った人、最初に目にした人は、マリアとヨセフでした。聖書の読み返しをすると、マリアもヨセフも、イエス・キリストの誕生という神秘的な出来事に至るまでに、出来事を受け入れようと悩み、もしかしたら苦しみ、それでも個人的な考えを横において、すべてをお任せするまでの大変な心の道のりを経てきました。

悩みながら戸惑いながらも、マリアもヨセフも、これから成長していくイエス・キリストに全面的に協力する心の広さを持ち合わせていました。特にマリアは、のちにイエス・キリストの地上での最後の場面、十字架の出来事までそばにいて、苦しみを共に受け止めてくださったのです。

およそ二千年前は、イエス・キリストが最初に出会った人々はマリアとヨセフでした。では今年のクリスマスにイエス・キリストが最初に出会うのはいったい誰なのでしょう。ナカダコウジという一個人でしょうか。それとも誰か別の一個人でしょうか。

わたしは違う考えを持っています。今年も、イエス・キリストが最初に出会うのはマリアとヨセフであるはずです。マリアとヨセフに出会わなければならないのです。ではどこに、マリアはおられるのでしょうか。ヨセフはどこにおられるのでしょうか。

今年は、現代のわたしたちが、マリアとヨセフとして、クリスマスにおいてになるイエス・キリストをお迎えする必要があると思っています。マリアと同じ心構えで、ヨセフと同じ心構えで、イエス・キリストを受け止めるとき、今年のクリスマス、今年のイエス・キリストの誕生が完成するのではないのでしょうか。

ではマリアと同じ心構えとは何でしょうか。マリアは、悩みと戸惑いの中で、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」

（ルカ 1・38）と答え、神の計画が前に進むためなら、喜んで身をささげますと答えました。わたしたちが、「神さまの計画が前に進むためなら、喜んでお手伝いします」そんな思いで幼子の前にひざまずくなら、わたしたちはマリアと同じ心で幼子イエスの前にいるのです。

ヨセフと同じ心構えとはどのようなものなのでしょうか。ヨセフは婚約期間からすでに思い悩んでいました。婚約を解消しようと思っていました。大きな悩みを抱えつつも、それでもイエスが生まれた時はマリアと幼子を守り抜き

ます。そんな思いだったでしょう。男性の皆さんが、神の計画に協力する中で困難は予想されるけれども、わたしに託されたものを守り抜きます。そんな思いで幼子とマリアの前に立つならば、ヨセフと同じ心でここにいるのです。

イエスが幼子としてこの世界においでになった時、最初に出会う人はマリアとヨセフでなければならないのです。救い主の誕生の前に、謙虚に身をかがめる人々でなければならないのです。「わたしがいるからこの会は成り立っているのよ」とばかりに自分が中心になって取り巻きを作り、なびかない人は退けるような身の毛のよだつような人はイエスの前に立つことは許されないので

す。いつか、羊飼いがイエスの前に立つでしょう。いつか、占星術の学者たちがイエスの前にひざまずくでしょう。けれども権力にしがみついた人、人を人とも思わない人がイエスの前に立つのはずっと先のことなのです。わたしたちが今日、イエスに近づこうとするなら、マリアの心、ヨセフの心でなければなりません。

今日お生まれになったイエスは、初めて目にする人としてあなたを受け入れてくださるのでしょうか。イエスの目に、わたしはどのように映っているのでしょうか。幼子イエスの前にひざまずいて、自分の心に問いかけることにしましょう。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）